

映画作品に関するユーザーレビューの分析

——リンクコミュニティを用いた鑑賞者の関心に関する検討——

Analysis of User Reviews of Film Productions:
An Examination of Viewer Interest Using Linked Communities

林 延哉

要約

筆者は以前に映画『シン・ゴジラ』について投稿されたユーザーレビューの内容について計量的な分析によって検討を行ったことがあるが(林 2019)、今回、現在担当している授業の資料作成に際して当時のデータの再検討を行った。林(2019)で用いたレビューデータと同時期に他のサイトに掲載されていたレビュー記事をデータとして、作品に対する高評価群と低評価群にデータを分けた上で、両者のレビュー内容の比較を行った。両群から「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」に関連するレビュー文を抽出し、それぞれに共起ネットワークを作成、リンクコミュニティによるコミュニティ抽出の方法を用いてレビュー内容を検討した。その結果、高評価群、低評価群とも作品に対する認識としては類似した内容が得られるが、その認識を肯定的に評価するか、否定的に評価するかで両群が異なっていることが示された。

1 はじめに

筆者は以前に映画『シン・ゴジラ』についてネット上に投稿されたユーザーレビューの内容について計量的な分析による検討を行ったことがあるが(林 2019)、今回、現在担当している授業の資料作成に際して当時のデータの再検討を行ったので、このことについて報告する。

林(2019)では、レビュー記事全体における頻出語を検討した後、レビュー記事全体を対象にして共起語の検討を行った。そこから『シン・ゴジラ』がゴジラ作品シリーズのひとつとして語られていること、エヴァンゲリオンシリーズの監督である庵野秀明を総監督として制作されたためエヴァンゲリオンとの対比でも語られていること、ゴジラという「災害」に見舞われた日本・東京で日本政府の官僚・政治家がこの事態にどのように対

処していくのかという映画の主たるストーリーに観客が強く訴求していたことが伺われるといった考察を行った。

また、レビューアがつけている作品に対する評価値を0.5から10までの0.5点刻みの10グループに分けて、対応分析を行った。その結果、作品に対する評価点の低いグループと高いグループは、レビューにおいて作品全体についてその良し悪しを論じるのに対して、中程度の評価を与えているグループは、演出・CG・庵野監督の他の作品や米国版ゴジラとの比較・ストーリー上の具体的な内容や登場人物等の個別の事象について論じる傾向があることを示した。

筆者が現在担当している学部の授業において、当時の共起ネットワークの分析の結果を資料として使用することを考えたが、林(2019)におけるそれは2-gramによる隣接する語の共起を確認したものに留まっていた。

そこで今回、改めて、文単位の共起語によるネットワークグラフからリンクコミュニティによるサブグラフを作成し、ユーザーレビューにおいてどのような話題が語られていたのかの再検討を行った。その際、レビュー記事を、作品への評価の高いレビューと、作品への評価の低いレビューに分け、その比較を行った。

2 分析に用いたデータについて

今回は、データとして林 (2019) で用いたものと同時期に映画情報サイトであるYahoo!映画に掲載されていた『シン・ゴジラ』に関するレビュー記事を用いた。

『シン・ゴジラ』は、総監督庵野秀明、監督・特技監督樋口真嗣により、2016年に封切られた日本映画である。日本で制作されたゴジラ作品としては29作目にあたり、前作の『ゴジラ ファイナルウォーズ』(2004年封切り)からは12年ぶりの作品となる¹⁾。

公開日である2016年7月29日からDVDの発売日の前日である2017年3月21日までのレビューのうち、レビューアーが総合評価として星4ないし星5をつけたものを高評価レビュー、星1ないし星2をつけたものを低評価レビューとして分析対象とした²⁾。高評価レビューは3268件、低評価レビューは1072件になった。

分析にあたってレビュー本文に対して形態素解析を行ったが、形態素解析にはGiNZA (v5.1) を使用した。GiNZAは形態素解析に

SudachiPyを用いているので、実際の形態素解析にはSudachiPy (v0.6.7) を用いたことになる。この際、レビュータイトルも一文としてレビュー本文に加えている。

なお、事前に行った形態素解析とネットワークグラフの作成の結果から、出演している役者の名前が姓と名に分離してしまうもの、『シン・ゴジラ』の内容に関連した特有の用語、映画のレビューであれば通常用いられると考えられる用語として、「長谷川博己」「石原さとみ」「野村萬斎」「ヤシマ作戦」「ヤシオリ作戦」「巨大生物」「在来線爆弾」「凝固剤」「巨神兵」「人間ドラマ」「登場人物」「エンドロール」をユーザー辞書に名詞として追加した。また、総監督の庵野秀明によるアニメシリーズ「エヴァンゲリオン」については、「エヴァ」「エバ」「エヴァンゲリオン」等かなり多くの表記ゆれが見られたため「エヴァンゲリオン」に統一する処理を行っている。

分析の対象語としては名詞・形容詞・動詞を選択し(形容詞・動詞については原形を使用)、幾つかの語をストップワードとして除外した³⁾。

結果として高評価レビューでは見出し語16919語、総語数226016語、低評価レビューでは見出し語9416語、総語数66527語が得られた。

3 高評価レビュー・低評価レビューの頻出語について

高評価レビュー、低評価レビューそれぞれ

1) 日本におけるゴジラ作品については、林 (2008a,2008b) をご参照いただければと思う。

2) Yahoo!映画では、レビュー対象作品に対して総合評価として、星1 (最低) から星5 (最高) の5段階の評価を行えるようになっていた。

3) ある・思う・いう・こと・もの・なる・方・ない・いる・くる・行く・いく・よう・する・しまう・回・ところ・時・つ・中・目・観る・見る・さん・言う・もの・ゴジラ・映画・作品・人・氏・くれる・よる・出る・感じ、の35の単語を除外した。

表1 高評価レビュー、低評価レビューそれぞれの頻出語上位30語

高評価レビュー		低評価レビュー	
単語	頻度	単語	頻度
日本	3059	エヴァンゲリオン	662
エヴァンゲリオン	1823	日本	473
庵野	1614	シーン	426
監督	1501	監督	424
怪獣	1477	良い	415
良い	1455	評価	415
シーン	1404	感ずる	343
面白い	1319	怪獣	324
感ずる	1133	面白い	324
日本人	862	石原さとみ	299
描く	843	庵野	293
シンゴジラ	816	cg	282
いい	799	やる	267
自衛隊	798	いい	264
好き	757	多い	258
リアル	755	感	247
政府	738	会議	245
人間	717	期待	241
特撮	704	好き	228
評価	700	すぎる	225
自分	685	人間	221
事	679	悪い	220
最後	669	政府	218
多い	662	映像	218
作る	640	わかる	213
楽しめる	615	アニメ	209
ハリウッド	607	リアル	204
やる	605	演出	204
気	603	作る	202
年	591	ファン	198

の頻出語（上位30語）を表1に示した。それぞれのレビュー群に含まれるテキスト量に違いがあるため頻度実数には大きな開きがあるが、その順位を見る限り、両群が同様の様相を示していることを見て取れる。

例えば上位10語を見ると、高評価レビューでは「日本」「エヴァンゲリオン」「庵野」「監督」「怪獣」「良い」「シーン」「面白い」「感ずる」「日本人」、低評価レビューでは「エヴァンゲリオン」「日本」「シーン」「監督」「良い」「評価」「感ずる」「怪獣」「面白い」「石原さとみ」となる。「日本」「エヴァンゲ

リオン」「監督」「怪獣」「良い」「シーン」「面白い」「感ずる」の8語が共通しており、高評価レビューに固有のものは「庵野」「日本人」、低評価レビューに固有のものは「評価」「石原さとみ」になる。この内、「庵野」は、低評価レビューでは頻出語順位11番目に登場する。「日本人」は上位30語の範囲内には登場しない。一方の「評価」は高評価レビューでは20番目に登場する語であるが「石原さとみ」は上位30語の範囲内には登場しない⁴⁾。

上位10語の単語に着目した場合は、高評価レビューにおいては「日本人」が、低評価

レビューにおいては「石原さとみ」が、両レビュー群を隔てる可能性のある単語として示唆される。

同じ単語を用いていてもその意味するところは当然のことながら文脈によって異なる可能性がある。そこで、以下では単語の頻度ではなく、文中での共起語の検討を行う。

4 共起語の検討

高評価レビュー、低評価レビューそれぞれにおける共起語の検討を行った。

共起の範囲としては、レビュー記事ではなく、文を用いた。文の区切りは原則として句点を利用しているが「!」「?」も文の区切りとして扱った。もともとのレビューにおいては、句点を使わず改行を用いて文の終わりを表す表記も見られたため、文の区切りを認識させるために、そのような場合は改行を句点に置き換える処理を行っている。その結果、高評価レビューは42078文、低評価レビューは13615文となった。

レビューデータから文-単語行列を作成し、これを元に共起行列を作成したが、これに基づくネットワークグラフの作成も含めて、これらの作業については柿他(2022)掲載のプログラムを参照させていただいた。

表2は、高評価レビュー、低評価レビューそれぞれにおける出現頻度上位10位までの共起語である。図1はそれらのネットワークグラフを表示したものである⁵⁾。

高評価レビュー・低評価レビューともに最も出現頻度の大きい共起語の組み合わせは「庵野-監督」であった。次いで高評価レビューでは、「政府-日本」「エヴァンゲリオン-庵野」「エヴァンゲリオン-監督」「ハリウッド-版」「庵野-秀明」「対応-政府」「シーン-会議」「今-日本」「形態-第」と続き、低評価レビューでは「評価-高」「エヴァンゲリオン-監督」「評価-高い」「シーン-会議」「エヴァンゲリオン-庵野」「ハリウッド-版」「エヴァンゲリオン-ファン」「悪い-気持ち」「エヴァンゲリオン-好き」と続く。総監督である庵野秀明に関する言及がいずれのレビューにおいても高頻度を示しているが、それにつ

表2 高評価レビュー・低評価レビューそれぞれにおける上位の共起語

高評価レビュー			低評価レビュー		
単語1	単語2	頻度	単語1	単語2	頻度
庵野	監督	855	庵野	監督	129
政府	日本	296	評価	高	114
エヴァンゲリオン	庵野	280	エヴァンゲリオン	監督	84
エヴァンゲリオン	監督	229	評価	高い	75
ハリウッド	版	210	シーン	会議	70
庵野	秀明	203	エヴァンゲリオン	庵野	67
対応	政府	189	ハリウッド	版	60
シーン	会議	184	エヴァンゲリオン	ファン	57
今	日本	181	悪い	気持ち	54
形態	第	165	エヴァンゲリオン	好き	47

4) 「石原さとみ」は高評価レビューの38番目、「日本人」は低評価レビューの67番目に出現する。

5) ノードの大きさは単語の出現頻度を、エッジの太さは共起対の出現頻度を反映している。

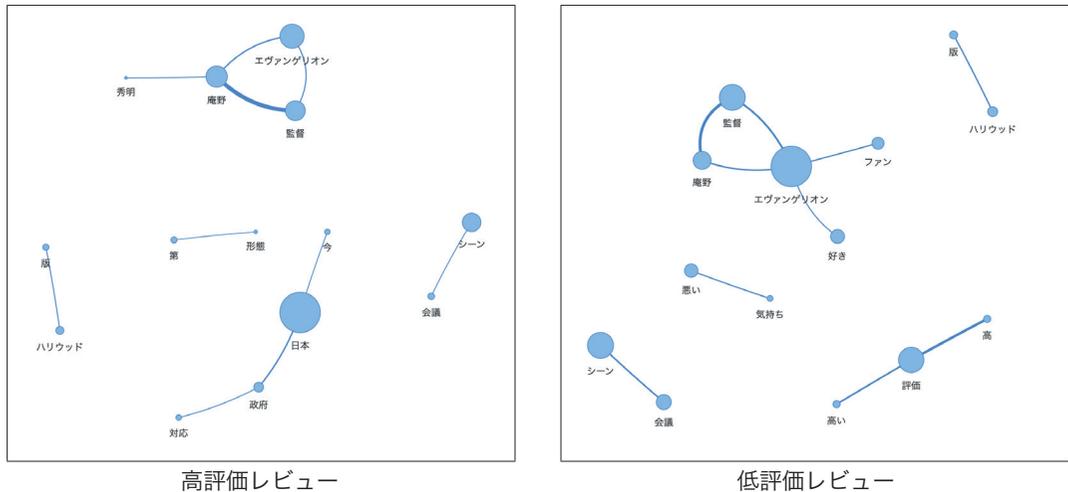


図1 上位10対による共起ネットワークグラフ

いで低評価レビューにおいては同じく庵野秀明が監督を担当しているアニメシリーズ「エヴァンゲリオン」に関連する言及、会議シーンに関する言及、ハリウッド版に関する言及と続くが、高評価レビューにおいては低評価レビューとは異なり「日本」に関連する話題が次いで登場してくる。

ただし、上位113対までを抽出すると、高評価レビューでのノード数は95、低評価レビューでのノード数は104となるが、この際の次数中心性を算出すると、高評価レビューにおいては「日本」「庵野」「エヴァンゲリオン」「監督」「シーン」の順に、低評価レビューにおいては「エヴァンゲリオン」「日本」「シーン」「監督」「評価」の順に高い中心性を示す。この結果からは、単語の出現頻度や共起語の出現頻度からは、高評価レビューにおいても低評価レビューにおいても、主に取り上げられている話題に大きな違いは見られないように思われる。ただし、低評価レビューにおいては「エヴァンゲリオン」が最も話題の中心として取り上げられ、高評価レビューにおいては「日本」が話題の中心となっていることはうかがわれる。

5 「庵野」・「監督」・「エヴァンゲリオン」に関するネットワーク分析

高評価レビュー・低評価レビュー間の違いを検討するために、ここでは、両者に共通して頻出する「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」に関連する共起語から、そこで扱われている話題の内容について検討する。

そのために、まず、高評価レビュー、低評価レビューのそれぞれから、「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」のいずれかを含む文を抽出した。この抽出した文から高評価レビュー、低評価レビューそれぞれにおいて単語の共起行列を作成し、これをもとに単語をノード、共起をエッジとするネットワークグラフを作成した。ただし、その際に「庵野」「エヴァンゲリオン」「監督」の語は除外している。これは、それらの語を含むと、それらの語との共起頻度が他と比べて非常に高くなり、他の語の共起関係を確認する際の妨げになることを避けるためである。

その上で、作成したネットワークグラフからサブグループを抽出した。このサブグループを「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」に関連するトピックを示すものとして、その内

容を検討した。

サブグループの抽出に際しては、リンクコミュニティの抽出法を用いた(鈴木2017)。通常のコミュニティ(サブグループ)の抽出においてはノードをサブグループに分割する方法が取られるためノードはいずれかひとつのグループに属することになる。一方リンクコミュニティの抽出法の場合エッジの類似性によってグループの抽出を行うため、ひとつの頂点が複数のサブグループに属することが許される。リンクコミュニティの計算に関してはRのlinkcommパッケージ(バージョン1.0.14)を利用した。

5.1 高評価レビューのリンクコミュニティ

高評価レビューの中から「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」のいずれかを含む文を抽出した結果、3412文が抽出された。ここから「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」を除いた上で文-単語行列を作成し、そこから共起行列を作成した。

共起語の出現頻度上位から178対を抽出し、共起語をノード、共起関係をエッジとし

たネットワークグラフを作成し(ノード数は118。表3に参考として上位26対を掲載した)、このネットワークからリンクコミュニティを抽出した。

結果として22のコミュニティ(サブグループ)が抽出された。図2は、抽出されたコミュニティとそこに含まれるノード(単語)を図にしたものである。図2においては、紙幅の都合から10単語のみで作図しているが、22のコミュニティとそこに属するノードの一覧を表4に示した。

得られた22のサブグループを「エヴァンゲリオン」「庵野」「監督」に関するレビューで取り上げられている話題を示すものとして考える。ただし、その内容の考察に際しては、22のサブグループとそれらに配置された85の単語の所属関係をダミー変数を用いた配列としてグループ間のJaccard距離を用いてクラスター分析⁶⁾を行い、9つのグループにまとめなおした(表5。表中のサブグループの番号は表4の「コミュニティ」の番号に対応)。

このように新たなグループを作成すると、例えばグループ1であれば、サブグループ9

表3 「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」に関する共起語頻度(高評価)

単語1	単語2	頻度	単語1	単語2	頻度
樋口	特撮	28	カット	割り	15
秀明	総	28	喜八	岡本	15
好き	特撮	27	樋口	進撃	15
劇場	版	26	アニメ	実写	14
使う	音楽	25	怪獣	日本	14
樋口	真嗣	24	ハリウッド	版	14
好き	楽しめる	21	樋口	総	14
巨人	進撃	19	bgm	使う	13
巨神兵	東京	17	ガメラ	樋口	13
ガメラ	平成	16	大	線	13
樋口	秀明	16	大	踊る	13
真嗣	秀明	16	伊福部	音楽	13
悪い	良い	16	演出	音楽	13

6) クラスター分析にはRのhclust関数を用い、クラスタリング手法としてはウォード法(ward.D2)を指定した。

と17がひとつのクラスターを構成することになった。サブグループ9に属するノードは「感ずる」「演出」「良い」「秀明」、17に属するのは「感ずる」「演出」「良い」「音楽」で、共通する語からは「演出」に関連する感想についてのグループと考えられる。具体的な内容については、「演出」と「良い」、「感ずる」と「良い」、あるいは「感ずる」と「演出」を含む文を抽出することでこのグループに関連する主な文を抽出し、この抽出された文の内容を検討することで検討可能と考えられる。同様にグループ7であれば、サブグループ1・6・15・16・19・20に属するノードの

構成からは「好き」と「特撮」あるいは「好き」と「ファン」を含む文を抽出すれば関連する主な文を抽出できると考えられる。表5における抽出ルールは、上述の文の抽出の際のルールを示す。「かつ」を「and」、「または」を「or」で表しているので、グループ1であれば「(演出and良い) or (感ずるand良い) or (演出and感ずる)」、グループ7であれば「好きand(特撮orファン)」と表現できる。表中の「文数」は各ルールで抽出された文の数である。

各グループの内容については、以下の様であった。

表4 高評価レビューにおけるノードのコミュニティへの配置

ノード	コミュニティ	ノード	コミュニティ	ノード	コミュニティ
シリーズ	1	秀明	9	音楽	16
好き	1	良い	9	特撮	16
樋口	1	シンゴジラ	10	感ずる	17
特撮	1	作る	10	演出	17
日本	2	日本	10	良い	17
樋口	2	樋口	10	音楽	17
特撮	2	秀明	10	シリーズ	18
秀明	2	bgm	11	日本	18
巨人	3	会議	11	樋口	18
樋口	3	作戦	11	版	18
進撃	3	大	12	ファン	19
作る	4	捜査	12	好き	19
怪獣	4	線	12	楽しめる	19
日本	4	踊る	12	特撮	19
劇場	5	わる	13	秀明	19
新	5	東京	13	ファン	20
版	5	現	13	作る	20
事	6	カメラ	14	好き	20
好き	6	シリーズ	14	自分	20
特撮	6	平成	14	スタッフ	21
秀明	6	樋口	14	作る	21
巨神兵	7	好き	15	樋口	21
東京	7	樋口	15	総	21
現る	7	特撮	15	使う	22
伊福部	8	秀明	15	曲	22
昭	8	総	15	流れる	22
音楽	8	ファン	16	音楽	22
感ずる	9	好き	16		
演出	9	演出	16		

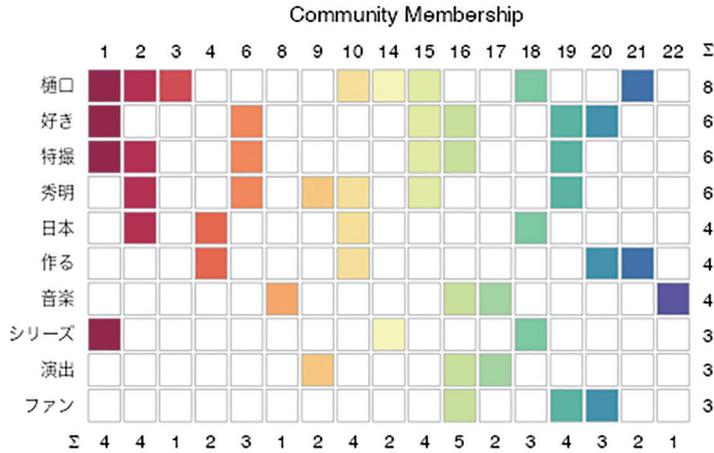


図2 ノードとリンクコミュニティの所属関係

表5 サブグループを再編成して得られたグループとサブグループの配置

グループ	含まれるサブグループ	抽出ルール	文数
グループ1	9, 17	(演出and良い) or (感ずるand良い) or (感ずるand演出)	25
グループ2	7, 13	東京and (現るor (現andわる))	15
グループ3	8, 22	音楽and (昭or流れる)	18
グループ4	12	大and捜査and線	10
グループ5	5	新and劇場and版	14
グループ6	6, 11	BGMand会議and作戦	5
グループ7	1, 6, 15, 16, 19, 20	好きand (特撮orファン)	39
グループ8	2, 4, 10	日本and (樋口or作る)	24
グループ9	3, 14, 18, 21	樋口and (シリーズor進撃orスタッフ)	31

グループ1 庵野監督の演出への肯定的評価

このグループでは、「エヴァンゲリオンらしい演出が小気味よく効いていて、音楽も良かった」「政府の対応のプロセスを丁寧かつテンポよく描けているのは監督の手腕を感じられる」「登場人物の早口なセリフや難しい言葉遣いが分かりづらい印象を与えるが、これも監督の良い演出だと思ふ」等、多くの意見が、テンポの良さ、庵野監督らしい演出・エヴァンゲリオン的な演出、旧ゴジラ作品への監督のこだわりやリスペクトを肯定的に評価した内容になっている。ただし、エヴァン

ゲリオンぽさを否定的に捉える見解もあった。

グループ2 『巨神兵東京に現わる』との類似

『巨神兵東京に現わる』は2012年に東京都現代美術館で開催された「館長庵野秀明特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和平成の技」で公開された9分あまりの短編映画で、監督は樋口真嗣、脚本は庵野秀明となっている。その後同年公開の『エヴァンゲリオン新劇場版: Q』と併映もされている。

「『巨神兵東京に現わる』に似た感じ」「『巨

神兵東京に現わる』はこの作品のパイロット版だったのだと納得した」「『巨神兵東京に現わる』の巨神兵のようにも思われ、ワクワクウキウキ感を感じられた」等、『巨神兵東京に現わる』との類似を指摘するものや、それとの類似を肯定的に評価したものが多かった。

グループ3 伊福部昭の音楽の利用への肯定的評価

伊福部昭は戦前から戦後にかけて活躍した作曲家であるが、1954年公開のゴジラ作品第1作『ゴジラ』の音楽を担当し、その後も複数のゴジラ作品の音楽を担当している。彼がゴジラ作品に提供した音楽はその後のゴジラ作品でもしばしば用いられているが、『シン・ゴジラ』においても同様である。レビューでは伊福部による曲が用いられていることを肯定的に評価しているものが多かった。またエヴァンゲリオン作品中の曲が用いられていることへの言及もあった。

グループ4 「踊る大捜査線」との類似

『踊る大捜査線』は1997年にフジテレビで放映された刑事ドラマで、その後多くのシリーズ作品が作られた。劇場映画作品も4作が作られている。レビューでは、「踊る大捜査線」の会議シーンの多さや使用されている音楽とエヴァンゲリオンの音楽との類似という点から、『シン・ゴジラ』が踊る大捜査線作品を思い起こさせることを指摘していた。

グループ5 「エヴァンゲリオン新劇場版」との類似

ここに含まれるものはエヴァンゲリオンシリーズの劇場映画である「エヴァンゲリオン新劇場版」との関連で、「たまかな流れはまさしく『エヴァンゲリオン新劇場版:序』」「『エヴァンゲリオン新劇場版:序』にストーリー構造が似ている」「エヴァンゲリオン新

劇場版:序』を実写にしたような感じ」等、ストーリー展開やテンポの良さの類似を指摘し、肯定的に評価するものが多かった。

グループ6 作戦会議シーンのBGMについて

ここに含まれるものは、作戦会議シーンのBGMがエヴァンゲリオンで用いられていた音楽であることを指摘したものが主であるが、そのことについては「絶妙」という評価もあれば「あれはいけません」という評価もあった。

グループ7 特撮好き・エヴァンゲリオン好きには楽しめる作品

このグループに含まれるレビューは、特撮好き、エヴァンゲリオン好き、ゴジラ作品好きな人には楽しめる、という内容が中心を占めている。また、総監督、監督、あるいはスタッフの特撮好きを評価する内容もあった。一部には、平成期のゴジラ作品ファンには勧められないという意見もあったが、概ね特撮好き、エヴァンゲリオン好きが楽しめる映画であることを肯定的に評価するものであった。

グループ8 『日本沈没』との比較、あるいは日本映画としての評価

ここに含まれるレビューには、ふたつの意味合いのものが含まれていた。ひとつは樋口真嗣が本編監督を行った2006年公開の劇場映画『日本沈没』を失敗作とした上で、その「リベンジ」であるとか、それとの類似を指摘するものであり、いまひとつは、日本の映画としての『シン・ゴジラ』を肯定的に評価する意見であった。ゴジラ作品はハリウッドでも制作されているが、制作費やCG技術等の差はしばしば語られるところである。このグループに含まれるレビューでは、『シン・ゴジラ』が日本ならではの特撮映画であることを評価する意見が複数見られた。

グループ9 樋口監督への肯定的評価・スタッフへの感謝

『シン・ゴジラ』はエヴァンゲリオン作品を手掛けている庵野秀明が総監督を務めていることに着目して語られることが多いが、抽出に用いた単語からも分かる通り、このグループは監督・特技監督を務めた樋口真嗣に関連する文が中心となっている。ひとつの基調は樋口真嗣が監督を務めた2015年公開の劇場映画『進撃の巨人』を引き合いに出しつつ、「別人ですか?」「リベンジを果たした」「無念の魂は報われた」「轍は踏まぬとの真摯な姿勢で特技監督職に徹する」「あの『進撃の巨人』と同じ樋口監督でどうしてここまで違うのか」と『シン・ゴジラ』を高評価する

ものが多い。

また、平成ガメラシリーズ⁷⁾を挙げながら、「平成ガメラシリーズ以上の素晴らしい仕事ぶり」とするものや、「庵野総監督のためにエヴァンゲリオンシリーズの系譜で語られがちな本作だが、樋口監督の平成ガメラシリーズの系譜でも語られるべき」とするものもあった。

「スタッフ」については、総監督・監督に加えて「スタッフ」の語を挙げながら、良作を作成したかれらに感謝をする、という内容が複数あった。

5.2 低評価レビューのリンクコミュニティ 低評価レビューの中から「庵野」「監督」

表6 低評価レビューにおけるノードのコミュニティへの配置

ノード	コミュニティ	ノード	コミュニティ	ノード	コミュニティ
ファン	1	やる	8	演出	13
評価	1	好き	8	いい	14
高	1	実写	8	しれる	14
アニメ	2	アニメ	9	ファン	14
実写	2	作る	9	好き	14
撮る	2	出す	9	自分	14
樋口	3	好き	9	楽しめる	14
真嗣	3	ファン	10	評価	14
秀明	3	残念	10	bgm	15
ガメラ	4	自分	10	伊福部	15
平成	4	良い	10	使う	15
樋口	4	テレビ	11	曲	15
やる	5	劇場	11	流れる	15
演出	5	新	11	音楽	15
秀明	5	版	11	いい	16
わる	6	ファン	12	アニメ	16
巨神兵	6	分かる	12	ファン	16
東京	6	好き	12	好き	16
現	6	秀明	12	実写	16
大	7	面白い	12	感ずる	16
捜査	7	bgm	13	期待	16
線	7	ファン	13		
踊る	7	感ずる	13		
いい	8	今まで	13		

7) 1995年公開の『ガメラ大怪獣空中決戦』、1996年公開の『ガメラ2レギオン襲来』、1999年公開の『ガメラ3邪神〈イリス〉覚醒』の3作。いずれも監督を金子修介、特技監督を樋口真嗣が務めている。

「エヴァンゲリオン」のいずれかを含む文を抽出した結果、1059文が抽出された。ここから「庵野」「監督」「エヴァンゲリオン」を除いた上で文-単語行列を作成し、そこから共起行列を作成した。

共起語の出現頻度上位から175対を抽出し、共起語をノード、共起関係をエッジとしたネットワークグラフを作成し（ノード数は133）、このネットワークからリンクコミュニティを抽出した。結果として16のサブグループが抽出された。表6に16のコミュニティとそこに属するノードの一覧を示した。

得られた16のサブグループを、高評価レビューの場合と同様、「エヴァンゲリオン」

「庵野」「監督」に関するレビューで取り上げられている話題を示すものとして考える。ただし、高評価レビューの際と同様にサブグループ間の距離に基づいてクラスター分析を行い、結果として8つのグループにまとめ直した（表7。項目については表5と同様）。

以下、各グループの内容について述べる。

グループ1 エヴァンゲリオン好き・庵野監督好きには楽しめる作品

「庵野監督ファン、エヴァンゲリオンファンとしてはエヴァンゲリオンの実写化として楽しめたが」「これだけ問題点があっても観客受けがいいのはアニメ好きや庵野監督が好

きな人には合うのだろう」「アニメ好き、庵野監督好きというのを除いて一つの映画としてみたときに、今の評価がそのまま当てはまるのかは疑問」といった、庵野監督ファン、エヴァンゲリオンファンには楽しめる映画であることを指摘する内容になっている。ただし、高評価レビューのグループ7と比較した場合、高評価レビューにおいてはそのことを肯定的に評価する傾向があったのに対し、こちらのレビューでは作品に対しては否定的な評価を下していると考えられる。

グループ2 高く評価しているのはエヴァンゲリオンファンのみ

このグループの内容もグループ1の内容に似て、『シン・ゴジラ』を高く評価しているのはエヴァンゲリオンファンのみ、映画の評価が高いのはエヴァンゲリオンファンが多いから、といった指摘になっている。「高評価のレビューを見るとエヴァンゲリオンファンの評価ばかりで映画としてきちんと評価されていない」という内容もあれば「ゴジラがこのような扱われているのにゴジラファンが評価していることがわからない」という意見もあり、全体としては他のレビューア等の高い評価に対して疑義を呈する内容になっている。

表7 得られたグループとサブグループの配置（低評価レビュー）

グループ	含まれるサブグループ	抽出ルール	文数
グループ1	2, 8, 9, 16	(実写orアニメ) and好き	6
グループ2	1, 10, 14	(評価or自分) andファン	14
グループ3	5, 12, 13	(演出andファン) or (演出and秀明) or (ファンand秀明)	10
グループ4	3, 4	(樋口and真嗣) or (樋口andカメラ)	7
グループ5	15	伊福部	7
グループ6	11	劇場and版	9
グループ7	6	巨神兵and東京	4
グループ8	7	捜査and線	3

グループ3 ワンパターンな演出に対する否定的評価

ここではエヴァンゲリオン作品における演出との類似を指摘しつつそのことが否定的に評価されている。「庵野監督の演出を理解している人は楽しめるかもしれないが、「ゴジラ」を純粋な怪獣娯楽映画として捉えている人は違和感を覚えるかも」「ゴジラの演出がエヴァンゲリオンの使徒とまるかぶり」「ワンパターンな演出を露呈」「作戦名やBGMなどエヴァンゲリオンファンが無条件で喜ぶような演出は好くない」「エヴァンゲリオンで聞いたことのあるような音楽が流れるような演出は幼稚」というような、エヴァンゲリオン作品での演出と異なる演出が行われていない点を指摘した内容になっている。

グループ4 樋口監督作品なのに何故

文を抽出するのに用いた語が「樋口」「真嗣」「ガメラ」なので当然のことではあるが、樋口監督や平成ガメラシリーズに言及した内容になっている。「平成ガメラシリーズはもっと話に整合性が取れていた」「平成ガメラシリーズは傑作」「庵野総監督のために本来特撮的な見せ場を十分に作れるポテンシャルがある樋口監督が思うように作れなかったのでは」といった内容の文が含まれている。樋口監督の他作品も否定的に捉えていると思われる文もあるが、平成ガメラシリーズと今回のゴジラ作品との対比で、「樋口監督なのに何故こうなのか」という意見のグループと考えられる。

グループ5 伊福部昭の音楽の利用について

このグループは伊福部昭の音楽の利用に言及した内容だが、ゴジラ作品に提供された伊福部昭の音楽の利用に対する否定的な評価ではなく、伊福部の曲と、雰囲気やジャンルが異なるエヴァンゲリオン的な楽曲を混在させていることや伊福部の曲を録音し直しやミッ

クスなども行わずそのまま使用していることなど、他の使用曲との関係の中での伊福部の曲の扱われ方への違和感が中心に述べられている。音楽的な面での演出に対する否定的評価が中心のグループと言える。

グループ6 「エヴァンゲリオン新劇場版」

このグループは、劇場映画作品である「エヴァンゲリオン新劇場版」に言及した内容のグループになっている。

内容としては「『エヴァンゲリオン新劇場版:序』を見た方がいい」「『エヴァンゲリオン新劇場版:序』の焼き直し」「TV版エヴァンゲリオン・劇場版エヴァンゲリオン・『シン・ゴジラ』と何回同じことを繰り返すのか」といった、エヴァンゲリオン作品との類似を指摘するものと、「『シン・ゴジラ』よりも「エヴァンゲリオン新劇場版」の最終章を早く公開して欲しい」という二通りの書かれ方があったが、「同じようなものを作るのであれば、未完となっている「エヴァンゲリオン新劇場版」の完結編を作って欲しい」という内容にまとめることができると思われる。

「エヴァンゲリオン新劇場版」は4作品から構成されており、第1作『エヴァンゲリオン新劇場版:序』が2007年公開、第2作『エヴァンゲリオン新劇場版:破』は2009年、

第3作『エヴァンゲリオン新劇場版:Q』が2012年に公開され、完結編となる『シン・エヴァンゲリオン新劇場版:II』は『シン・ゴジラ』公開時点ではまだ公開されていなかった(2021年公開)。

グループ7 『巨神兵東京に現わる』

このグループには4つの文しか含まれていない。内容としては、「『巨神兵東京に現わる』をゴジラでやっただけ」「『巨神兵東京に現わる』のような短時間の映像なら良いが1時間超えの映画では見るに耐えない」といった『巨神兵東京に現わる』との類似を意識し

つつ、『シン・ゴジラ』については否定的に評価する内容になっている。

グループ8 「踊る大捜査線」

このグループに含まれるのは3文である。「踊る大捜査線」を連想した、「踊る大捜査線」が好きな人はこの映画も気に入るだろう、エヴァンゲリオンに「踊る大捜査線」と東日本大震災の再現ドラマを足したような作り、という内容であった。

5.3 高評価レビューと低評価レビューの比較

5.1、5.2で述べた高評価、低評価それぞれのレビューの内容に関するグループ（話題）を表8に示した。

以下、対応すると考えられるグループについて高評価レビュー、低評価レビューそれぞれのレビュー内容について検討する。低評価レビューの側のグループ数が少ないので、こちらを基準として見ていく。

エヴァンゲリオン好き・庵野監督好きには楽しめる作品

低評価レビューにおける話題としてグループ1としたものの内容は「エヴァンゲリオン好き・庵野監督好きには楽しめる作品」というものであった。これと同内容のものとしては高評価レビューのグループ7がある。高評価群、低評価群とも、エヴァンゲリオン好き・庵野監督好きの人であれば楽しめる映画である、という評価内容については異ならない。ただし、高評価レビューにおいては、そのこと自体を肯定的に評価しているが、低評価レビューにおいては、その事自体が否定的な評価事項となっている。『シン・ゴジラ』がエヴァンゲリオンの、庵野監督作品的と感じられる点においては見解は一致しており、レビューアがそれを肯定的と受け止めるか否定的と受け止めるかという点で異なっている。つまりはエヴァンゲリオンの作品が好きか嫌いかで評価の高低が左右されている、と考えられる。

表8 高評価レビュー・低評価レビューにおける話題

高評価レビュー		低評価レビュー	
グループ	話題の内容	グループ	話題の内容
1	庵野監督の演出への肯定的評価	1	エヴァンゲリオン好き・庵野監督好きには楽しめる作品
2	『巨神兵東京に現わる』との類似	2	高く評価しているのはエヴァンゲリオンファンのみ
3	伊福部昭の音楽の利用への肯定的評価	3	ワンパターンな演出に対する否定的評価
4	「踊る大捜査線」との類似	4	樋口監督作品なのに何故
5	「エヴァンゲリオン新劇場版」との類似	5	伊福部昭の音楽の利用について
6	作戦会議シーンのBGMについて	6	「エヴァンゲリオン新劇場版」
7	特撮好き・エヴァンゲリオン好きには楽しめる作品	7	『巨神兵東京に現わる』
8	『日本沈没』との比較、あるいは日本映画としての評価	8	「踊る大捜査線」
9	樋口監督への肯定的評価・スタッフへの感謝		

高く評価しているのはエヴァンゲリオンファンのみ

低評価レビューのグループ2の内容については「高く評価しているのはエヴァンゲリオンファンのみ」と名づけたが、グループ1と強く関連した内容になっている。他のレビューの評価を参照しながら、『シン・ゴジラ』の評価が高いのはエヴァンゲリオンファンが高く評価しているからだ、ということ指摘する内容になっている。

高評価レビューのグループ1は、エヴァンゲリオン作品らしい演出、庵野監督らしい演出を挙げながら、それとの類似を肯定的に評価していたわけだが、ここでも『シン・ゴジラ』とエヴァンゲリオン作品との類似という認識は共通している。低評価レビューのグループ2は、エヴァンゲリオン作品との類似によって『シン・ゴジラ』を肯定的に評価することへの疑義を申し立てたものになっている。

ワンパターンな演出に対する否定的な評価

低評価レビューにおける3つ目の話題を「ワンパターンな演出に対する否定的な評価」と名づけたが、その内容は、エヴァンゲリオン作品における演出との類似を指摘しつつ、そのことを否定的に評価したものだ。ゴジラの描写、作戦名のエヴァンゲリオン作品との類似、エヴァンゲリオン作品で用いられたのと類似の音楽の使用など、エヴァンゲリオン作品と異なる演出が行われていないことに対して否定的な評価をするものであった。言い換えるならば、ここでもエヴァンゲリオン作品との類似が指摘されているわけであり、異なる作品であるならば異なる演出があつて然るべきであろう、ということが提示されたと考えられるだろう。

樋口監督作品なのに何故

低評価レビューのグループ4については

「樋口監督作品なのに何故」と名づけたが、その理由は、その内容が平成ガメラシリーズで画期的な特撮を見せた樋口監督が、何故『シン・ゴジラ』ではその才能を発揮できなかったのか、それは庵野監督のせいではないのか、といった内容となっていたからである。

高評価レビューにおいても、樋口監督のこれまでの作品に言及する見解は多かった。高評価レビューのグループ8は樋口監督による『日本沈没』との比較であり、それを失敗作としている。グループ9においても樋口が監督を務めた『進撃の巨人』を失敗作としている。それらとの比較で『シン・ゴジラ』を高く評価しているわけだが、低評価レビューでは『日本沈没』や『進撃の巨人』は話題の中心には登らず、彼が特技監督を務めた平成ガメラシリーズとの比較で、「あの作品を作れた人が何故?」というものになっている。高評価のレビューアーが、樋口真嗣が監督をとった『日本沈没』や『進撃の巨人』を観つつそれらを低評価し、そことの比較で樋口監督について語っているのに対して、低評価レビューにおいては、日本の怪獣特撮映画の画期とも言われる平成ガメラシリーズの特技監督として樋口監督を位置づけつつ、それらの作品群との比較で『シン・ゴジラ』を低く評価していることが分かる。

伊福部昭の音楽の利用について

先述の通り、低評価レビューにおいては旧作のゴジラ作品に提供された伊福部昭の音楽の利用自体に対する評価ではなく、それがどのように使われたかということに対して、否定的な評価がなされている。一方の高評価レビューでは、それらが今作でも使われていることへの肯定的な評価が行われている。

両者の端的な違いを示すものとしては、例えば、低評価レビューの中の「エンディングロールも伊福部昭の曲をただ並べただけで新

規録音もミックスもしていない。しかもなぜ『ゴジラVSメカゴジラ』のテーマが流されるのか。監督の好きな曲をならべただけのような残念な出来」というものに対して、高評価レビューの中には「特にエンドロールは歴代のゴジラ音楽のオンパレードで一番最後に流れた『ゴジラVSメカゴジラ』のメインテーマは自分が一番好きな曲だったので感動して泣いた、自分としてはこの曲を最後に選んだ庵野監督は天才だと思った」という内容のものがあった。

「エヴァンゲリオン新劇場版」

低評価レビューにおける意見は、あえて言えば「こんな作品を作っている時間があるならば、『エヴァンゲリオン新劇場版』の完結編を早く作れ」とまとめられると思われる。一方、高評価レビューにおいても「エヴァンゲリオン新劇場版」への言及のグループが存在するが、それは『シン・ゴジラ』と「エヴァンゲリオン新劇場版」とのストーリー展開やテンポの良さの類似を指摘するものであり、ここでもまた、低評価レビューのレビューアーと高評価レビューのレビューアーの『シン・ゴジラ』と「エヴァンゲリオン新劇場版」との類似に関する認識については共通している。ただ、高評価レビューにおいては、そのことを肯定的に評価し、低評価レビューにおいては、「似たようなものを作っているならば、監督の本来であるエヴァンゲリオンの完結編を作ってくれ」という表現というなり、そのことが向かう評価の方向が異なっている。

『巨神兵東京に現わる』

『巨神兵東京に現わる』との関連についても、先述した「エヴァンゲリオン新劇場版」と同様と考えられる。『巨神兵東京に現わる』と『シン・ゴジラ』の類似の指摘は共通しており、高評価レビューではそのことを「『巨

神兵東京に現わる』は『シン・ゴジラ』のパイロット版だったと納得した」「『巨神兵東京に現わる』同様、ワクワクウキウキを感じる」といった肯定的な評価に向かうのに対して、低評価レビューでは、「『巨神兵東京に現わる』をゴジラでやっただけ」といった否定的評価に繋がっている。

いずれにおいても『巨神兵東京に現わる』と『シン・ゴジラ』の類似については共通しており、一方は「同じように良かった」と言っており、他方は「同じことをやっているだけ」と言っているという評価の向きの違いが両者を隔てている。

「踊る大捜査線」

低評価レビューの8番目のグループは「踊る大捜査線」と名づけたが、内容的には、「踊る大捜査線」と似ている、「踊る大捜査線」が好きな人は『シン・ゴジラ』も好むであろう、というものであり、これは高評価レビューのグループ4と同様の内容と考えられる。

終わりに

『シン・ゴジラ』が「エヴァンゲリオン的」であったということは、今回取り上げたレビュー内で共通した内容であったと考えられる。全体的な演出、作品のテンポ、使用されている音楽等、取り上げられているトピックは多岐に渡るとも言えるが、いずれにおいてもエヴァンゲリオン作品との比較の上で似ているか似ていないかが語られ、似ていることを肯定的に評価するか否定的に評価するかの違いであり、その由来するところは、レビューアーがそれを好むか好まないかに依拠していた、ということが言えるのではないかと思う。

「ゴジラ」は、1954年の第1作以来半世紀

以上に渡って作り続けられてきたシリーズ作品でもあり、日本のみならず海外でも製作されたシリーズ作品でもある。『シン・ゴジラ』以前の日本映画としてのゴジラ作品は2004年公開の『ゴジラ FINALWARS』が最終作であり、この作品は興行成績も振るわず、必ずしも高い評価を得た作品ではなかった。この後、2016年公開の『シン・ゴジラ』の間に、ギャレス・エドワーズ監督による『GODZILLA』が2014年に公開されている。この海外製作のゴジラ作品は、1998年公開のローランド・エメリッヒ監督による『GODZILLA』とは異なり、日本国内でも高い評価を得ている。この作品を後を受けての本国日本製の作品として『シン・ゴジラ』は期待された作品であった。当時エヴァンゲリオン作品の監督として注目を浴びていた庵野秀明と、日本の特撮怪獣映画の画期とも言える平成ガメラシリーズの特技監督を務めた樋口真嗣が組んで制作される新たなゴジラ作品は、否応なく期待が寄せられていたはずである。結果としてその内容は、エヴァンゲリオン作品に類似した演出によって作られた、良くも悪くも庵野秀明の作品として認識されざるを得ないような作品となった。

エヴァンゲリオン作品は、多くのファンを持つ日本を代表するアニメ作品であり、それに類似した作品が好まれること自体は、なんら不思議なことではない。ただ、一方では、ゴジラ作品という別流の流れを作品に感じていた人々にとっては違和感を抱かざるを得なかったと思われる。1954年の第1作『ゴジラ』、あるいはそこから始まる東宝特撮怪獣映画、あるいは他社映画会社をも巻き込んだ怪獣映画ブームなどを知る観客にとっては、庵野監督の「色」が強く出たアニメ的な演出によって作られた実写作品である『シン・ゴジラ』を受け入れ難かったのかもしれない。

平成ガメラシリーズは、特技監督を樋口真嗣が務めているが、監督は金子修介である。が、平成ガメラシリーズが監督の名によって語られることは庵野秀明と比して多くはないかと思う。

今回取り上げたレビューの中には、平成ガメラシリーズに言及したものはあったが、その監督である金子修介に言及したものは殆どなかった⁸⁾。金子は、1999年公開の『ゴジラ 2000 ミレニアム』から2004年公開の『ゴジラ FINALWARS』に至るミレニアムシリーズと呼ばれるゴジラ作品群の中の第3作『ゴジラ・モスラ・キングギドラ大怪獣総攻撃』の監督も務めているが、この作品への言及も殆どなかった。

1954年の第1作『ゴジラ』から1969年の『ゴジラ・ミニラ・ガバラオール怪獣大進撃』まで、日本を代表する特殊撮影技術の大家である円谷英二が特技監督、監修などを務めており、そのことでゴジラ作品が円谷英二とともに語られることは多いが、第1作『ゴジラ』から1965年の『怪獣大戦争』まで、また1968年の『怪獣総進撃』、1969年の『ゴジラ・ミニラ・ガバラオール怪獣大進撃』、1975年の『メカゴジラの逆襲』の監督は本多猪四郎である。この昭和期のゴジラ作品において、前述の作品以外では、小田基義、福田純、板野義満等が監督をとっている。しかし、それらの作品が監督名とともに語られることは多くはないのではないだろうか。

今回、『シン・ゴジラ』については、それが肯定的評価であれ否定的な評価であれ「総監督庵野秀明」に結び付けられて語られていることが多かった。それも庵野秀明の代表作である一連のエヴァンゲリオン作品との比較によってである。

高評価レビューと低評価レビューの間で話題としての着目点については、それほど大き

8) 「金子」の出現頻度は、高評価レビューで14回、低評価レビューで4回であった。

な違いは無いということが今回確認されたと考える。両者の違いは、それを肯定的と捉えるか否定的と捉えるかであり、あえて言えば庵野的表現が受け入れられるか否か、ということだったのではないかと思われる。当時の庵野秀明が、それほど強い個性を作品に反映させられる監督、それが許される環境を与えられた監督であったことが、あらためて確認されたのではないかと思う。

なお、筆者の関心としては、特に高評価レビューにおいてネットワークの中核をなしていく「日本」についての言及の検討があったが、時間的制限等の事由のため、その点については果たせなかった。今後の課題とした。

文献

- 林 延哉. (2008a). ゴジラ～忘却の軌跡～ (その1) 昭和期シリーズ. 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), 57, 29-48.
- 林 延哉. (2008b). ゴジラ～忘却の軌跡～ (その2) 平成/新世紀シリーズ. 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), 57, 49-69.
- 林 延哉. (2019). 『シン・ゴジラ』はどのように観られたのか: レビュー記事の計量的分析による検討. 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), 68, 115-125.
- 榊 剛史 (編著)・石野亜耶・小早川健・坂地泰紀・島田和孝・吉田光男 (著). (2022). Pythonではじめるテキストアナリティクス入門 (実践 Data Science シリーズ). 株式会社講談社サイエンティフィク.
- 鈴木 努. (2017). ネットワーク分析第2版. 共立出版株式会社.

(はやし・のぶや 本学部准教授)